

十字架の道行き信心の史的概観（3）

アメデ・テータールト・ドウ・ゼデルヘム

Aperçu historique sur la dévotion au chemin de la croix

Amédée Teetaert de Zedelgem

関根 浩子 訳

Transl. Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

（前号からの続き）

B-14留の十字架の道行き

1. 巡礼の初期の諸形態

こうした数多くの十字架の道行きの形態—これらの形態の間には、それらが包含していた受難のほぼ大部分のみならず、転倒や歩み、留の数、また、それらの間で採用され、現在の十字架の道行きの起源に対する影響が明らかな順序の点でも非常に大きな多様さが存在していた—と並んで、15世紀末には早くも別の十字架の道行きの形態が生じ始めていた。この留のシリーズは、我々の14留の十字架の道行きのシリーズと驚くほど似ている。我々の14留の十字架の道行きは、結局、その他の十字架の道行きの形態の諸要素が入り込んだ、この新しい形態の継続的な発展の到達点にすぎない。

今日認識され実践されている十字架の道行きの形態は、主に、十字架の道行きの信

心業に特殊この上ない地位を占めていた「靈的巡礼」と呼ばれる幾つかの信心書に負っている。巡礼記やキリストゆかりの聖跡の模造、キリストの受難場面の表現、キリストゆかりの聖跡の訪問に関連する数多くの靈的特典といったすべてのことが刺激となって、民衆はエルサレムへ旅をしたいと強く願うようになっていた。しかし、民衆の多くはこの大望を果たすことができなかったため、靈的著述家は靈的な旅、とりわけそれらの中でキリストゆかりの聖跡を靈的に訪問できる旅に関する著作を出版することで、民衆を満足させる方法を速やかに見出した。すでに幾冊か挙げてもいるこうした信心書は、特に15世紀末頃と16世紀に数多く出版されて、民衆にキリストゆかりの聖跡の靈的訪問方法を説いていた。それらの信心書には、特に、キリストゆかりの聖跡の訪問に関連した多くの免償が列挙されていたため、民衆はしばしばこうした靈的な旅に駆り立てられた。靈的著述家たちによれば、成し遂げた実際のエルサレ

ム訪問を通してと同様に、キリストゆかりの聖跡の霊的訪問によっても免償を得ることができたのである。

これまでに知られているこの種の最初の著作は、シント＝トレイデンの小さき兄弟会士の修道院の手稿中に現存している。それはおそらく、シント＝トレイデン近郊のシント・リユーシアード女子修道院（第三会員？）に属するものであったと考えられる。この十字架の道行きの信心業は、おそらくフランシスコ会士が 15 世紀前半に書いたものであり、小さき兄弟会士 A. ファン・デン・ヴェインガールトによって出版された⁽²⁰⁰⁾。シント＝トレイデンの手稿には序章の最後と第 1 留の大部分が欠けているため、G. ヒュージェンは、それらの欠けている部分を、ルールモント（オランダ）の高位聖職者 J. ファン・ギルスが所有する一冊の手稿に含まれている同一の十字架の信心業の写しに拠って出版した⁽²⁰¹⁾。その序章では、家を離れなくてもキリストゆかりの聖跡の訪問に関係する免償が得られるとされている。霊的巡礼に先立って神の前で謙虚になり、次いで十字架を負ったキリストに霊的に従ってキリストが被った苦しみを黙想し、キリストに同情すれば十分なのである。この不詳の著述家は、また、ピラトの館からカルヴァリオまでの間で起きたキリストの 33 回の転倒を記念して、ある留から別の留へ移動する間に 33 回の主の祈りと天使祝詞を唱える必要があるとも述べている。こうした十字架の道行きは、自分自身や、健在な友人、故人となった友人のためにも行える。この十字架の道行きを構成している留は、次の 1) ピラトによ

るイエスの死刑宣告、2) 十字架を担うイエス、3) ピラトの館の階段上でのイエスの最初の転倒、4) ピラトがキリストをユダヤ人に委ねる、もしくはエッケ・ホモの場面、5) イエスと聖母との出会い、6) イエスが十字架を運ぶのをキレネのシモンが助ける、7) ウェロニカがイエスの聖顔を拭う、8) イエスの転倒、9) イエスがカルヴァリオに登り十字架上で息絶える、10) 十字架の下での聖母の悲しみ、11) 十字架から降ろされ聖母の両腕に抱かれるイエス、12) 埋葬されるイエス、である。留と留との間の距離は歩数で示されている。また、留ごとに一つの黙想と一つの相応しい祈りがある。

この信心業は、その他の十字架の道行きに類する信心業に計り知れない影響を及ぼした。アントウェルペンのプランタン博物館**の手稿 47（16 世紀初め）中に M. メールテンが見出した十字架の道行きの信心業はその例であり、大部分シント＝トレイデンの手稿の信心業に依拠している。二つのテキストは文章的によく似ているだけでなく、プランタン博物館の手稿の信心業を構成している八つの留と、シント＝トレイデンの手稿の類似の留は一致している。なお、プランタン博物館の手稿の留とは、1) 死刑宣告を受けるイエス、2) ウェロニカがイエスの聖顔を拭う、3) イエスがエルサレムの娘たちと彼女らの間にいる聖母と出会う、4) 十字架の下での転倒、5) 十字架上で死、6) 聖ヨハネの腕の中に倒れる聖母の悲しみ、7) 十字架から降ろされるイエス、8) イエスの埋葬^(201a)である。各留には、唱えなければならない主祷文と

天使祝詞の数が示されているが、距離や免償は記されていない。

シント＝トレイデンの手稿のテキストときわめてよく似たもう一つの信心業は、日付は記されていないものの、1540 年より後のものに違いないスヘルトーヘンボス（ボワ＝ル＝デュック）で出版された小冊子中にあるもので、『カルヴァリオ山』（*Dit is den Berch van Calvarien*）と題されている。同書については、キリストの転倒に対する信心について論じた際にすでに言及した。この版には、キリストの転倒の崇敬方法（f. 11v.）とともに、十字架の道行きの信心業（ff. 1v-11r）も含まれている。同版のテキストは、シント＝トレイデンの手稿のテキストより簡潔ではあるが、導入部のみならず、留の点でもシント＝トレイデンのものによく似ている。例えば、イエスの死刑宣告と十字架を負うキリスト、聖母との出会いを含む第 1 留は、シント＝トレイデンの手稿の 1～5 留と大部分一致している。シント＝トレイデンの第 6 留は同冊子にはない。同冊子のテキストの第 3 留と第 4 留は、シント＝トレイデンの第 7 留に一致している。また、第 4 留はシント＝トレイデンの第 8 留に、第 5 留は第 9 留、第 6 留は第 10 留、第 7 留と第 8 留は第 11 留、第 9 留と第 10 留は第 12 留に一致している。各留では主祷文と天使祝詞を朗唱することが定められており、留の苦しみの場合にふさわしい黙想と祈りも示されている⁽²⁰²⁾。

シント＝トレイデンの手稿の十字架の道行きの信心業は、ベトレムによっても、先に分析した彼の優れた著作である『我らがいとしい主の受難についての敬虔な黙想』

（*Dit is devoet meditatie op die passie ons liefs Heeren*）の中で利用された。ベトレムの著書に見出される留の大部分は、シント＝トレイデンのものと一致しているし、いずれのテキストにもイエスとエルサレムの女性たちとの出会いが欠けている。しかし、ベトレムの信心業には、次のような特別なこと、すなわち最後の晩餐から聖墳墓までのキリストの受難に及ぶ受難全体に分配された留を含む長い信心業と、それより短いピラトの館から始まって聖墳墓で締め括られるいわゆる十字架の道行きの二重の信心業が含まれている。後者の短い方の信心業は 11 の留を必要としている。それらは現在の十字架の道行きの 12 の留に一致しているが、「2 度目の転倒」と「エルサレムの婦人たちとの出会い」が欠け、「聖衣剥奪」と「十字架につける」で一つの留を形成している。そこに列挙されている留は、さらに、今日実践されている十字架の道行きの順序と同じ順序で辿られている。このようにベトレムは、十字架の道行きの現在の留の数と順序にすでに著しく近づいているといえる。

このような類似は、カルメル会士ヤン・ファン・パスカ（1532 年没）が自ら霊的巡礼を行う中で出版した十字架の道行きの信心業ではいっそう際立っている⁽²⁰³⁾。この巡礼は 365 日ないしは 1 年を費やすもので、毎日所定の聖地旅行の一部か、パレスティナかエルサレムの一つのキリストゆかりの聖跡の訪問と、同時に一つの黙想のテーマや幾つかの信心業が割り当てられている。

ベトレムと同様にヤン・パスカも、長い

十字架の道行きとそれより短い道行きを認識しており、後者を真の十字架の道行き、もしくは本来のいわゆる十字架の道行き (*de rechte cruysganck*) としている。例えば、この旅の 188 日目の第 1 留の訪問ないしはオリーヴ園での苦悶の場面には、「ここに長い十字架の道行きの第 1 留が始まる」という告知を添えて新しい信心業が挿入されている。続いてパスカは、この十字架の道行きの祈りは 15 であり、非常に重要なことであるため、巡礼の時間以外の主として金曜日やその他の曜日にも唱えることができると述べている。193 日目には第 2 留かアンナの館が訪問される。196 日目には、第 3 留のイエスが牢屋に監禁されてユダヤ人らの嘲笑の的になった場所が訪問される。206 日目には、ピラトの前での救い主の裁判についての黙想の後に、「ここに真の十字架の道行き、ないしはカルヴァリオ山までの本来のいわゆる十字架の道行きが始まる」ことが告げられた後、テキストは再び中断されている。その後にはピラトによって死刑を宣告されたイエスに対する祈りを伴う第 4 留が続く。次いで順番としては、巡礼日と結びつけ、また各留の間の距離を表示して補完し、5 ピエディに相当する 2 倍の歩幅で測定した以下の留がくる。すなわち、4) ピラトの館と死刑宣告、5) イエスが十字架を負わされた場所 (13 歩の所に)、6) 聖母と出会い 2 度目に倒れた所でもある場所 (418 ピエディの所)、著者はここで救い主が十字架を負った所から 40 歩の所で初めて倒れたことを気付かせる、7) キレネのシモンが十字架を運ぶのを助け、またイエスが 3 度目に倒れた場所

(179 ピエディの所)、8) ウェロニカがイエスの聖顔を拭い、イエスが 4 度目に倒れた所 (418 ピエディの所)、842 ピエディ進むとイエスが 5 度目に倒れたカルヴァリオの上り坂の麓に達するが、これは留としては数えられていない、9) イエスがエルサレムの娘たちに顔を向け、6 度目に倒れた山沿いの場所 (872 ピエディの所)、10) 聖墳墓の入口にある 7 番目の最後の転倒を示す石 (404 ピエディの所)、11) イエスが聖衣を剥奪された場所 (9 歩の所)、12) イエスが磔にされた場所 (6 歩の所)、13) 十字架上でのイエスの死、14) 十字架降下、15) キリストの埋葬、である。

以上のことからわかるように、パスカの十字架の道行きには、少なくとも暗黙裡に我々の十字架の道行きの現行の 14 留が同じ順序で見出される。第 3 留と第 7 留、もしくは最初の転倒と 2 度目の転倒は、おそらく別の留としては示されておらず、留の数はより多く、出発点も異なっているが、パスカ自身か彼の編者の P. カランティンは、本来のいわゆる十字架の道行きがピラトの館から始まると述べることで、早くも最善と思われる修正のヒントを提供した。続いて我々には、H. サーストンのお蔭で⁽²⁰⁴⁾、ヤン・パスカの古いフランドルの巡礼が、現在の十字架の道行きの起源の問題全体を解く鍵となっていると結論づけられるように思われる。

パスカの留とベトレムの留を比較すると、留の数とそれらの配列が著しく似ているのに気付く。ここで比較するのは無意味ではあるが、ヤン・パスカにはベトレムに比べ著しい進歩が認められる。それは、ベトレ

ムの著書に、現行の十字架の道行きの基礎になっているシント＝トレイデンの手稿に比べて著しい進歩が認められるのと同様である。こうしてパスカはさまざまな留をより明確な方法で区別し、他方でそれらを留という名称で明示している。次いで彼は、エッケ・ホモの場面を留とはみなさず、イエスとエルサレムの婦人たちの出会いを留として挿入している。しかしパスカは、最初と2度目の転倒をそれぞれ異なる別の留として区別してはいない。これに対し、ベトレムにはそれら二つの留が見出される。しかし最後の転倒は挙げられていない。さまざまな留に割り当てられた長さについては、既述のように、ペーター・ステルクスが提供し、16世紀初めに彼がルーヴェンに建設させた7つの留の下方にも刻印されているデータに拠っているように思われる。

現行の14留の十字架の道行きの設置のための全要素を提供したという偉大な功績がヤン・パスカに帰するとしても、こうした十字架の道行きの形態の普及に最も貢献したのは、オランダ人のアドリヘム、本名クリスティアン・アドリヘム・クリュイスである。彼が院長を務めていた聖バルバラ修道院があるデルフトが1572年に乞食団によって占拠された際、彼はメッヘレン、次いでユトレヒト、そして最後はケルンに避難し、ケルンで1585年7月20日に息を引きとった⁽²⁰⁵⁾。シント＝トレイデンの手稿に含まれている信心業の著者が開始し、次いでベトレムとヤン・パスカが完成した十字架の道行きの形態を決定的に広めるのに貢献した二つの著作、すなわち16世紀末の『キリスト教時代のエルサレム』

(*Jerusalem sicut Christi tempore floruit*)⁽²⁰⁶⁾と『聖地の劇場』⁽²⁰⁷⁾ (*Theatrum Terrae sanctae*) は彼に帰される。前者については、オランダ語訳とボヘミア語訳の他に五つのラテン語版と6版のイタリア語訳、二つの英語版が存在していた。17世紀にはポーランド語訳とスペイン語訳が幾度も出版され、ドイツ語版も1版出版された。しかし、19世紀以前にはフランス語訳は存在しなかった。後者については、1772年までに約10版が知られ、1版のスペイン語版が幾度も増刷されたとはいえ、前者ほど普及はしなかった⁽²⁰⁸⁾。アドリヘムは、この後者のスペイン語版にそれまでの数多くの聖地巡礼記やエルサレム巡礼記に散見されていたすべての情報を集めるとともに、情報の典拠を全体にわたって入念に記している。

アドリヘムは、二つの^{ヴィア・ドロローザ}苦しみの道、すなわちイエスがピラトの館からカルヴァリオ山まで^{ヴィア・クルーチス}辿った十字架の道行きと^{ヴィア・カプティヴィタティス}捕縛の道とを認識していた。彼は、前者の道については、自身の典拠としてペーター・ステルクスやピエール・カランティン、ヤン・パスカ、ベトレムの名を挙げ、また留としては、1) イエスが死刑宣告を受けたピラトの館、2) 十字架を担うイエス、3) 最初の転倒、4) 聖ヨハネを伴った聖母と出会うイエス、5) イエスが十字架を運ぶのを助けるようキレネのシモンが強要される、6) ウェロニカがイエスの聖顔を拭う、7) 裁判所の出入口での2度目の転倒、8) イエスがエルサレムの娘たちに語りかける、9) カルヴァリオの麓での3度目の転倒、10) 聖衣を剥がされミルラと苦汁で口を湿らされるイエス、11) 十字架に釘付けされ

るイエス、12) カルヴァリオの穴に十字架をたてる⁽²⁰⁹⁾、を挙げている。以上の列挙からわかるように、最後の「十字架降下」⁽²¹⁰⁾と「聖墳墓」⁽²¹¹⁾の二つの留が欠けているが、それらについては、彼はいずれにしてももっと後で取り上げている。アドリヘムはまた、各留の間の距離についても示している。それは最後の二つの留についても同様である。

アドリヘムが挙げている留と各留の間の距離を、ヤン・パスカが示している明白かつ暗黙裡の留や距離と比較すれば、アドリヘムが、距離の長さだけでなく、留の配列についてもパスカから借用したことが明らかとなる。この比較の最も興味深い結果とは、H. サーストン- A. ブディノン⁽²¹²⁾によれば、おそらく、複数の留の間に見出される我らが主の3回の転倒の起源にそれが真理の光を投じてくれるという点にある。その光はおそらく、前もって言及した7回の古い転倒のシステムと、エルサレムで巡礼者に示されていた幾つかの伝統的な位置付けとの混合に関係している。ヤン・パスカでは、伝統的な7回の転倒のうちの4回は、十字架の道行きのその他のエピソード、すなわちイエスと聖母、イエスとキレネのシモン、イエスとウェロニカ、イエスとエルサレムの娘たちとの出会いと一致している。アドリヘムでは、これらの四つの転倒のうちの一つが言及されていない。同じことは、他方で、早くも、ペーター・ステルクスがルーヴェンに建設した留において生じていた。いかなるエピソードにも関係していないその他の三つの転倒は保持されたが、パスカは最初の二つの転倒を留とはみなして

いない。これに対してアドリヘムは、3回の転倒を三つのそれぞれ異なる留とみなしている。このことは、他方で、最後の二つの留に先行し、かつアドリヘムには欠けている留群については、パスカの十字架の道行きとアドリヘムのそれとの間の唯一の違いとなっている。また各信徒が、どのような場所—自宅や庭、教会あるいは礼拝堂内—においてであれ、キリストがエルサレムで辿った十字架の道行きに似た道行きを想起し、そこでキリストに霊的に従い、キリストの苦しみに同情できるように、留と留との間の正確な長さを注意深く示すようアドリヘムが明言しているのを強調するのも興味深い⁽²¹³⁾。

アドリヘムは、捕縛の道については、1) オリーブ園、2) イエスが捕えられた場所、3) アンナの邸宅、4) カイアフアの館、5) ピラトの館、6) ヘロデの館、7) 再びピラトの館、の7留を区別している。この場合にも、彼は聖跡と聖跡との間の距離を示している⁽²¹⁴⁾。

こうしたさまざまな霊的巡礼書の分析から、現行の十字架の道行きの最初の痕跡は、シント＝トレイデンの手稿に含まれている信心業中に見出されると推測される。この手稿には、小さき兄弟会士 M. ビールが指摘しているように⁽²¹⁵⁾、我々の十字架の道行きのうち9留が、今日我々が実践している道行きと同じ順序で挙げられている。続いてベトレムは、シント＝トレイデンの手稿の当初の形態を完成し、留の数を12とした。ベトレムの留とは多くの点で異なっているが、ヤン・パスカは12という数を維持した。パスカは同時にその他の二つ

の留の要素を提供したため、少なくとも暗黙裡に我々の 14 留に言及した最初の人であり、結果的に現行の十字架の道行きの立案者とみなしうる人物といえる。アドリヘムは 3 回の転倒を三つの異なる留として最初に挙げたものの、あいにく最後の二つの留を省略してしまった。しかし、この新しい十字架の道行きの形態を広めるのに誰よりも貢献したことは、彼の偉大な功績といえる。

こうした分析から、いかなる著述家も 16 世紀末まではまだ 14 留を明白には認めていないと推論される。というのも、ベトレムやパスカ、アドリヘムはいずれも、12 の留だけを認めているからである。従って、今日存在しているような 14 留を最初に導入した功績が誰に帰されるかという問題がどうしても提起される。この問題は、我々の手中にある資料では解決するのが困難か、さもなければ不可能な問題ではあるが、できる限り明らかにしていくことにしよう。

2. 15 世紀から 17 世紀までのエルサレムにおける十字架の道行きの形態

シント＝トレイデンの手稿から推察されるように、我々はおそらく 15 世紀前半には早くも十字架の道行きの留の大部分を入手している。また、これらの留は次第に補われて、16 世紀中頃には我々の十字架の道行きの 14 留は、少なくとも暗黙裡には早くもすべて知られている。従って問題は、当然ながら、上述の著述家たちが十字架の道行きに挿入された留を何処で見出したのかということ、また、十字架の道行きを行うという敬虔な信心業、とりわけキリスト

が十字架を負って辿った道の上で霊的にキリストに従うという敬虔な信心業の起源がどのようなものであるかということをつまららかにすることにある。言い換えれば、留の選択は、ヨーロッパで書かれた信心書の敬虔な創意工夫に由来しているのか、それともエルサレムで観察される伝統に由来しているのかということである。また、今日行われているような十字架の道行きの信心業は、エルサレムに存在する信心業の模倣であって、後にエルサレムからヨーロッパに移植されたのか、それとも上述の霊的著述家たちの影響下にエルサレムに導入されたのかということである。これら二つの問題を解決するには、同一の信心業がヨーロッパに導入される以前は、エルサレムでは十字架の道行きの信心業はどのようになされていたのか、また、そこで崇敬されていた留はどのようなものであったかを考えなければならない。

15、16 世紀の間にエルサレムを訪れ、その思い出を公にした数多くの巡礼者たちの証言から、16 世紀の末頃までは、エルサレムで公然と行われていたいわゆる本来の十字架の道行きの信心業は存在しなかったと結論される。

事実、巡礼者はいずれも、十字架の道行きに二つの部分、すなわち一方で十字架を負ってキリストが辿ったピラトの館から裁判所の門もしくはカルヴァリオまでの道に沿って置かれたキリストゆかりの聖跡、他方で聖墳墓記念聖堂内に含まれているキリストゆかりの聖跡を区別している。

こうしたキリストゆかりの聖跡は、連続して次々訪問されることはなく、別々に、

大抵はかなりの時間をおいて訪問されていた。同様に訪問は 16 世紀末頃までは聖墳墓記念聖堂内に置かれていたキリストゆかりの聖跡から開始されていた。聖墳墓記念聖堂を所有していたのがトルコ人であったため、彼らとのトラブルを避けるために*、フランシスコ会士は夜間は通常巡礼者を聖堂内に閉じ込めていた。巡礼者たちは夕べの祈りの後、グループになって列をなし、フランシスコ会士の導きの下で、著述家によって数が異なる聖堂内の至聖所を訪れ、夜が明けるまでの残りの時間は祈ったり告解したり、また聖体を拝受したりしていた。1480 年頃エルサレムを訪れたドミニコ会士 F. ファブリは、自著である『聖地並びにアラビア、エジプト巡礼記』(*Evagatorium in Terrae Sanctae Arabiae et Aegypti peregrinationem*)の中で、この行列をそのように詳述し⁽²¹⁶⁾、17 の至聖所⁽²¹⁷⁾を挙げている。聖墳墓記念聖堂の至聖所の訪問は巡礼記のいずれにも見出されるが、その数は大抵 10 から 14 までの間でバラついている。

この記念聖堂内で訪問され、かつ現在の十字架の道行きの留に一致しているキリストゆかりの聖跡には、一般に「聖衣を剥奪されるイエス」と「磔刑」、「十字架上でのイエスの死」、「聖墳墓」が挙げられる。しかし「十字架降下」は、「塗油の石」がそれに当たらないとすると欠けていることになる。後年になって聖墳墓記念聖堂内で訪問すべき至聖所、もしくはキリストゆかりの聖跡の数が 12 に確定されるに至った時には、さらに「聖衣剥奪」も省かれていたため、現行の十字架の道行きの中では三つの留だけが残ったことになる。12 の至聖

所とは、1) 答刑の円柱、2) キリストの牢屋、3) 聖衣剥奪と直接結び付けられる聖衣分割、4) 聖ヘレナの礼拝堂、5) 聖十字架発見の礼拝堂、6) 侮辱の礼拝堂と円柱、7) ゴルゴタの至聖所の磔刑の祭壇、8) イエスが息を引きとった祭壇と十字架の穴、9) 十字架降下と関係づけられる塗油の石、10) イエスの墓、11) キリストがマグダラの聖マリアに姿を現した礼拝堂、12) イエスが聖母に出現した礼拝堂、である。

巡礼者の大部分は、また、至聖所間の移動の際に歌われていた讃歌や、同様に、各至聖所で唱えられていた交唱や詩(行)、応唱、祈禱、もしくはフランシスコ会士が行った訓辞—各聖跡で崇敬された玄義について説明して巡礼者をその玄義の黙想へと誘ったり、彼らに許可される免償を告げたりするために行われた—についても言及している⁽²¹⁸⁾。

夕べの祈りの後、聖墳墓記念聖堂内で夜間に十字架の道行きの最後の部分が訪問された間は、ごく早朝に十字架の道行きの最初の部分、もしくは 15 世紀以降一般にそう呼ばれている苦しみの道が通過されていた。16 世紀中頃までは、巡礼者たちは聖墳墓記念聖堂の中庭に集まり、そこから、フランシスコ会士と一人のトルコ人—トルコ人に起因することもあった面倒や厄介事から巡礼者たちを守っていたに違いない—の指揮の下に出発して、市内や市壁外にあったキリストゆかりの聖跡を訪問していた。彼らが遭遇した最初のキリストゆかりの聖跡群は、ピラトの館からカルヴァリオまで十字架を運びながらキリストが辿った道の上にあった聖跡である。この道は反対

方向、すなわちカルヴァリオからピラトの館へと辿り直すものであった。最初の停留地は、一つの石が目印となっていた場所であった。それは大聖堂の中庭の外の、キリストが十字架の下に倒れた所と言われていた道のごく近くにあり、救い主の3度目の転倒に一致していると考えられる場所であった。そこから、我らの主が十字架を負って辿ったのと同じ行程を辿りながら町へと下り、一つの古い門、すなわち裁判所の門に到着していた。この門は、ドミニコ会士 F. ファブリ（1483 年）の時代にはすでに荒廃していた地区にあり*、人々は免償を得ようとそこで足を止めていた。続いてそこを通り抜けてエルサレムに入り、ピラトの館の方を目指しながら、十字架を負ってイエスが進んだのと同じ行程を辿っていた。巡礼者たちは、ウェロニカの家や悪い金持ちの家、イエスがキレネ人に助けられた場所、イエスとエルサレムの婦人たちとの出会いの場所、神々しい自身の息子と出会った際聖母が卒倒した場所、ピラトがイエスに死刑宣告した場所、キリストが鞭打たれ、荊冠を載せられた場所、ヘロデの館、ファリサイ人シモンの家といったさまざまな場所で足を止めて祈りを捧げ、自身の信仰心を満足させていた。これらは F. ファブリが列挙した聖跡である⁽²¹⁹⁾。

著述家たちが回想しているその他の聖跡も、いずれにせよ見出される。例えば、著述家たちはほとんどすべて、エッケ・ホモのアーチと聖なる階段^{スカーラ・サンタ}についても語っている。その他のウィリアム・ウェイのような著述家たちは、さらに「ベテスダの池」（羊の池）や「イエスがその上で死刑宣告

された石」、「聖母が教育を受けた場所」、「キレネ人が十字架を運ぶのを助けるよう強要される前の十字架の下での転倒」⁽²²⁰⁾についても触れている。W. ウェイが挙げた転倒は、マリアーノ・ダ・シエナにも見出される⁽²²¹⁾。彼は 1431 年に聖地を訪れていた⁽²²²⁾。この同じ転倒はさらに、後代の巡礼者たち、例えばジークムント・フォイヤアーベント⁽²²³⁾や、1586 年⁽²²⁴⁾に聖地旅行をしたアト（ベルギー）の市長、ジャン・ジュアラルの『きわめて敬虔なエルサレム旅行』（*Le très dévot voyage de Jérusalem*）⁽²²⁵⁾中にも挙げられている。「苦しみの道」に沿って巡礼者たちが行ったさまざまな休止に対して適用された「スタチオ」（*statio*）という名称は、そのような正確な意味では、イートン校の最初の名誉校友のひとりであるウィリアム・ウェイが初めて用いたと考えられること、また、この名称は、人々が立ち止まっていた苦しみの道沿いの聖跡だけを指し、他のキリストゆかりの聖跡は指していないことは注目すべきである⁽²²⁶⁾。「スタチオ」という名称はやがて一般化され、後代の巡礼者によって苦しみの道沿いの停留だけではなく、その他のキリストゆかりの聖跡でなされていた停留を指すのにも用いられた⁽²²⁷⁾。

16 世紀中頃には、人々は通常はもはや聖墳墓の中庭ではなく、裁判所の門の所に集まり、十字架を負ってイエスが聖別した道を通り抜けていた。この変更の理由は、思うに、その頃から裁判所の門が壁の中に塗り込められて、その場所が家屋で占められたため、もはやカルヴァリオから下ってそこを抜け、十字架を負ってキリストが

通った道を霊的に辿ることができなかったという事実求められなければならない。

J. ジュアラール（1586 年）がこの門は壁で塞がれていると述べ⁽²²⁸⁾、ヤン・ファン・コートヴェイク（1596 年）も、「今日ではその門は通行できず、何の役にも立たない。というのも部分的に塞がれており、私有地となって公法の対象ではなくなったからである」(*hodie illa porta transitum nullum praebet nulliusque usus est; siquidem ex parte obturata et privatorum praediis inclusa publici iuris esse desiit*)⁽²²⁹⁾ と記しているのはその例である。同様に著述家たちはいずれも⁽²³⁰⁾、「苦しみの道」の訪問を裁判所の門から始めており、それは K. A. クネラーが引用している A. ロッケッタやその他の多くの著述家についても当てはまる⁽²³¹⁾。同じ証言は、次の世代の巡礼者にも見出される。例えば 1639 年にエルサレムに滞在していた小さき兄弟会士フランチェスコ・クァレスミオ神父⁽²³²⁾は、裁判所の門の向こうの救い主が辿ったカルヴァリオまでの行程は建物で覆われてしまっており、囲い地であることと家屋が原因で、迂回する必要があったと述べている⁽²³³⁾。同じ頃、小さき兄弟会士ベルナルディン・スリウス⁽²³⁴⁾は、裁判所の門の向こうは土地が建物で覆われており、救い主が辿った道を再び見出すのは不可能であると明言している⁽²³⁵⁾。聖墳墓の中庭の正面にある石が、もはや苦しみの道に沿ってキリストゆかりの聖跡を訪れるための出発点でないことを、H. サーストン- A. ブディノンのように⁽²³⁶⁾驚く必要はない*。

さらに、同じ H. サーストン- A. ブディ

ノン⁽²³⁷⁾に賛同して、ピラトの館からカルヴァリオまでの十字架の道行きが 16 世紀初頭からなされていたと唱えることは適切ではない。というのも、16 世紀末に人々は裁判所の門から出発してピラトの館まで遡っていたからである。従って、巡礼者がフランシスコ会士の案内で十字架を負ってイエスが行った道行きをピラトの館から辿り始めたのは、16 世紀もようやく末のことである— 17 世紀と言い添えておこう— と K. A. クネラーが述べているのは正しい⁽²³⁸⁾。そしてこの場合、彼らはカルヴァリオまでは進まず、裁判所の門で歩みを止めていた。それは、上述のように、裁判所の門が壁に塗り込められていて、一切の通行が妨げられていたという単純な理由によるものであった。

17 世紀には、エルサレムの十字架の道行きの留のほぼ安定した確定が目撃される。留の選択や配列、また留と留を隔てている距離には、以前としてかなりのヴァリエーションが存在しているとはいえ、ピラトの館と裁判所の門の間には通常八つの留が含まれていた。例えばフランチェスコ・クァレスミオ⁽²³⁹⁾は、以下の八つの留、すなわち 1) イエスが平手打ちされたピラトの館、2) 笞刑の場所、3) ヘロデの館、4) エッケ・ホモのアーチ、5) 聖母の卒倒の聖堂、もしくはイエスと聖母の出会いの場所、6) イエスの転倒とイエスとキレネのシモン並びにエルサレムの婦人たちとの出会い、7) ウェロニカの家、8) 裁判所の門、を挙げている。小さき兄弟会士ベルナルディン・スリウスは、これに対し、1) ピラトの館、2) エッケ・ホモのアーチ、

3) 卒倒の聖母の聖堂、4) イエスの転倒とキレネ人との出会い、5) イエスとエルサレムの婦人たちとの出会い、6) ファリサイ人シモンの家、7) ウェロニカの家、8) 裁判所の門、を挙げており⁽²⁴⁰⁾、そのコースは裁判所の門で中断されている。

以上のことから、15、16、17 世紀の間、巡礼者たちが十字架を負ってキリストが行った道行きをキリストに合一しながら、またキリストの苦しみへ同情しながら辿り直そうとしたとしても、その行程をそれ自体特殊で完璧な信心業とはみなしていなかったと結論される。先に考察したように、巡礼者たちは何よりもまず、そのコースを別々に訪問されていた二つの部分、すなわち聖墳墓記念聖堂内に置かれていた聖跡と、苦しみの道に沿って出くわす聖跡に分けていた。さらに 16 世紀末まではこの道は反対に辿られており、聖墳墓記念聖堂もしくは裁判所の門から出発していた。最後に、苦しみの道に沿った主要なキリストゆかりの聖跡もしくは留については、自身の信心を満足させるためにそこで足を止めることは許されていなかった。それはトルコ人が巡礼者に対して引き起こしていた厄介や難題が原因であり、そうした問題は 19 世紀まで続いた⁽²⁴¹⁾。

それゆえ、エルサレムで 15、16、17 世紀に実践されていた十字架の道行きの信心業と、15 世紀以降、とりわけ 16 世紀以降に西欧の主としてベルギーで流行した信心業との間には根本的な相違が存在していた。このことから、西欧で流行した信心業はエルサレム起源ではありえないということが明らかに演繹される。エルサレムにはその

ような信心業は存在すらしていなかったし、（存在していたとしても）西欧におけるそれと同じでなかったことは間違いない。

この結論は、十字架を負って我らの主が辿った行程上に配列された留を、特にシント＝トレイデンやベトレム、ヤン・パスカ、アドリヘムの手稿書の公表後に西欧において実践された十字架の道行きの留と比較するならば、なおさらいっそう明らかになる。15、16、17 世紀のいずれの世紀においても、エルサレムでは形式的に異なる 3 回の転倒と十字架を負ったイエスの留、聖衣剥奪（少なくとも多くの場合）、そして十字架降下が欠落しているのはその例である。エルサレムでは、我らの主の受難とは一切関わりがなく、十字架を負って主が辿った道程とも関係がない多くの留、すなわち悪しき金持ちの家や、ファリサイ人シモンの家、聖母が教育を受けた場所、ベテスダの池、ヘロデの館、笞刑の場所…などが挿入されている。エルサレムでは、多くの場合、2 度目の転倒と、キレネのシモンやエルサレムの婦人たちとイエスとの出会いは同じ場所に置かれているが、これに対して西欧の信心業では、これらの場面は三つのまったく別の留を形成していた。さらに、多くの場合、イエスはまずはエルサレムの婦人たち、次いでウェロニカなどに会った。

こうしたことすべてから、15 世紀以降、とりわけ 16 世紀以降に西欧で実践された十字架の道行きの信心業は、いかなる点でもエルサレムに由来するものではないと明快に結論づけられる。しかし我々は、大部分の留に表現されている主題が、巡礼記を介してエルサレムに由来している場合があ

ることも否定はしない。しかし、留の選択や配置、配列は疑いなく西欧起源であり、それ自体特別で完全な信心業とみなされている十字架の道行きの信心業全体も西欧起源なのである。

しかし、これらの時代に、十字架を負ってイエスが辿った道を、我らの主と同じ方向、すなわちピラトの館からカルヴァリオ山へ向けて通過した巡礼者がいることも否定できない。その 15 世紀の例として、K. A. クネラー⁽²⁴²⁾は、ハインリヒ・フォン・ツェドリッツ (1493 年) とペーター・リントフライシュ・フォン・ブレスラウ (1496 年) を挙げている。16 世紀には、リチャード・トンキントン (1517 年)⁽²⁴³⁾や、1539 年にエルサレムへ旅をして⁽²⁴⁴⁾著作を刊行した小さき兄弟会士アントニオ・デ・アランダ⁽²⁴⁵⁾、またジャン・ジュアラル⁽²⁴⁶⁾がいる。しかし、列挙されている留は、彼らの同時代人たちが挙げている留と一致しているため、十字架の道行きをその頃例外的にピラトの館からカルヴァリオ山に向けて行っている者たちは、方針に従ってそうしているわけではないと言える。それは、H. サーストンが述べているように⁽²⁴⁷⁾、エルサレムのフランシスコ会士たちが何らかの理由で方針を変えたためかもしれないし、K. A. クネラーが主張しているように偶然であったかもしれない⁽²⁴⁸⁾。あるいはまた、十字架の道行きを秘かに行うことで、故国で行われている方法に倣おうとしたためであったかもしれない。フランシスコ会士の指揮下にグループでなされた公式の訪問にあっては、実際、既述のように、17 世紀末にはまだ裁判所の門から出発していたこ

とは疑いない。

次いで、16、17 世紀の数多くの巡礼団からは、フランシスコ会士のフランチェスコ・クァレスミオとベルナルディン・スリウスが苦しみの道の留について提示した伝統がエルサレムのフランシスコ会士に公式に受け入れられていたことや、現行の我々の留のシステムが当時はそこで実践されていなかったことが明らかとなる。ここにも、苦しみの道に沿って見出される留の訪問に際して、エルサレムで公式に受け入れられ辿られていた伝統に一致しているというより、むしろ例外的な方法で新システムに従って留を列挙している巡礼者が幾人かいる。そのシステムは、シント＝トレイデンの手稿、並びにベトレムやヤン・パスカが開始し、アドリヘムが広め、西欧の特にベルギーと、当時ベルギーを支配下に置いていたことで同地から導入されていたと思われるスペインでも実践された。

そうした巡礼者のうちの一人、デルフトの敬虔な床屋のアレント・ウィレムスゾーンは、早くも 1525 年に、自らの旅行記⁽²⁴⁹⁾の中で現行の我々の留の大部分を挙げ、また聖都訪問に充てられた叙述の中で、それらの留のエルサレムにおける場所と距離を示している。彼は、ピラトの館からの出発の後、「救い主が十字架を負った場所」や「最初の転倒」、「イエスと聖母、並びにイエスとエルサレムの婦人たちとの出会い」、「イエスの聖顔を拭うウェロニカ」、「十字架を運ぶのを強えられるキレネのシモン」、「エルサレムの婦人たちに語りかけるイエス」、「ウェロニカの家」、「裁判所の門」、さらに「イエスが最後に倒れた聖墳墓記念

聖堂の前の石」を列挙している。彼は、「イエスがカルヴァリオの麓で倒れた場所」についても述べている。

ミュウアイ・クシシュトフ・ラジヴィウ⁽²⁵⁰⁾は、1583年に以下の留、すなわち「ピラトの館」と「エッケ・ホモのアーチ」、「マリアの卒倒」、「キレネ人に助けられるイエスの最初の転倒」、「悪しき金持ちの家」、「ウェロニカの家」、「イエスに涙するエルサレムの婦人たち」、「裁判所の門と2度目の転倒」、「聖墳墓の前の石の上での3度目の転倒」を挙げている。

プロテスタントのジョージ・サンディも、その『1610年に着手した旅についての報告』（*Relation of a Journey begun in 1610*）⁽²⁵¹⁾の中で、イエスの3回の転倒を挙げている。1610年には、小さき兄弟会士ジャン・ブーシェ⁽²⁵²⁾が、順序は異なるものの、カルヴァリオまでの我々の現行の十字架の道行きのすべての留、すなわち「ピラトの館」と「法廷」、「エッケ・ホモのアーチ」、「イエスが死刑宣告を受けた場所」、その下で「イエスが十字架を負わされた聖なる階段」、「聖母マリアの卒倒」、「最初の転倒」、「イエスに涙する婦人たち」、「キレネのシモンが十字架を運ぶのを助ける」、「2度目の転倒」、「ウェロニカがイエスの聖顔を拭う」、「裁判所の門からカルヴァリオまでの苦しみの道」を挙げている。

1664年という同じ年に、小さき兄弟会士B. スリウスは伝統的な留のシステムを普及させ、カプチン会士イグナティウス・フォン・ラインフェルデン⁽²⁵³⁾は、我々の現行の十字架の道行きのうちの最初の11の留を挙げている。しかし、11の留の列

挙の順序は依然として異なっており、「ピラトの館」、「イエスが十字架を負わされた場所」、「最初の転倒」、「イエスと聖母との出会い」、「ヘロデの館」、「2度目の転倒」、「十字架を運ぶのを強られるキレネのシモン」、「エルサレムの婦人たちとの出会い」、「悪い金持ちの家」、「ウェロニカの家」、「裁判所の門での3度目の転倒」、「兵士たちが十字架を準備している間救い主が独房に閉じ込められていたカルヴァリオの麓」、「カルヴァリオの上り坂」、「聖衣を剥奪されるイエス」、「磔刑」、「十字架の設置」となっている。

伝統的かつ公式でもあるシステムと並ぶ、エルサレムにおけるこうした新しい留のシステムの導入はどのように説明できるであろうか。フランシスコ会士が巡礼者の指揮に際して、その頃、方法とシステムを変えたと仮定すべきであろうか？そうは思われない。何よりもまず、それはきわめて例外的なものと言える。というのも、当時エルサレムで一般的に行われた十字架の道行きの公式の訪問記録からは、既述のように、フランシスコ会士は常に古い留のシステムを採用していたということが推測されるからである。次いで問題となるのは全般的に巡礼者で、彼らは新しい留のシステムが普及していた地域の出身者であるか、あるいは他のどんなシステムよりも新システムが好んで実践されていたフランシスコ会に属していた。それゆえ、幾人かの巡礼者が自らの信心を満足させるために、イエスが十字架を担いで辿った道程を単独もしくは小グループで通過しながら、彼らの故国か教団においてそこで立ち止まることを習慣と

していた留を訪問していたということを認めるならば、16、17 世紀の間、彼らがエルサレムでその新システムを例外的に採用したことは十分に説明できる。幾人かの巡礼者によってエルサレムに導入されたこの新システムは、それゆえ、西欧のこうした巡礼者たちの故国や教団内で流行した後者のシステムが及ぼした影響によるものと言えよう。従って、今日実践されているのと同じような十字架の道行きの信心業は、エルサレム起源ではなく、西欧からエルサレムに導入されたものであろう。

この結論は、新しい留の配列—ヤン・パスカやベトレム、シント＝トレイデンの手稿の著者とといったフランドル人らによって彼らの霊的巡礼の中で予告され、また、とりわけアドリヘムの著作の極端な人気のお蔭で普及した—が、エルサレムにおいて 17 世紀以降、フランシスコ会士が当時まで公式に辿っていた古い留のシステムより次第に優勢になったことを考慮するならば、なおさら明らかとなる。この新しい配列は、その新システムと長い系譜をもつフランシスコ会の著述家たちとの間に多くの形式的な矛盾点を抱えながらも、およそ 1 世紀後には、エルサレムの小さき兄弟会士たちに受け入れられた。事実、17 世紀までは、苦しみの道に関する記述はすべて—キリストゆかりの聖跡や苦しみの道の留に関する何世紀にもわたる伝承の受託者であるエルサレムの同僚たちの日々の報告に従ってフランシスコ会士が起草したもの—主要な点で完全に一致しており、既述のように、それらの間にはいかなる重要な部分にもくい違いはない。エルサレムのフランシスコ会

的伝承の中でも最も信頼のおける証言者は、異論の余地なくクアレスマイオ神父と B. スリウスである。スリウスについては、すでに彼の十字架の道行きの留のシステムを示しているし、苦しみの道に関する彼の詳細な記述も H. サーストン—A. ブディノンによって公にされている⁽²⁵⁴⁾。苦しみの道の留に対するエルサレムのフランシスコ会士の何世紀にも亘る一致した伝承に反して、エルサレムでは 17 世紀になると、既述のフランドルの著述家たちが開始し、オランダ人アドリヘムが広めた新しい留のシステムの影響がますます感じられるようになる。こうした変化が生じた連続する諸段階を詳細に述べることは本稿では不可能であるため、全体的な輪郭を示すことで満足することにしたい。

デルフトの敬虔な床屋や君主の N. Chr. ラジヴィウ、小さき兄弟会士ジャン・ブーシェ、カプチン会士イグナティウス・フォン・ラインフェルデンに帰される苦しみの道の留に関する先に紹介した記述からは、16、17 世紀のこうした巡礼者たちが、ますます流行するようになったこの新しいシステムと、エルサレムのフランシスコ会の古い伝承とを結び付けようとしたことがわかる。というのも彼らは、エルサレムの伝統的な留と並んで、当時まで東方では知られていなかった一連の新しい留を挿入しているからである。さらに留の配列については、当時エルサレムで認められていた順序にまだ全体的に一致していると言える。

1569 年にエルサレムに滞在したベルナルディーノ・アミーコ⁽²⁵⁵⁾やクアレスマイオ神父といったその他のフランシスコ会士た

ちは、おそらくは古い留のシステムを守るために、アドリヘムが示したさまざまなデータに対して概ね強い批判を行い、彼の著書に含まれている幾つかの誤りを指摘している。さらに、1665年にエルサレムに滞在したアントニオ・ゴンザレスや、聖地に関する記述が現存しているフランシスコ・カッチャといったフランシスコ会士たちは、二つのシステム、すなわち古いシステムとアドリヘムのシステムとを結び付けている。1627年にエルサレムに滞在したアントニオ・デル・カスティッロ⁽²⁵⁶⁾やホアン・デ・カラオラ⁽²⁵⁷⁾といったフランシスコ会士は、アドリヘムの留のシステムもしくはプランを、依然として古い伝統的なシステムとともに模倣している。

H. サーストン- A. ブディノン⁽²⁵⁸⁾によれば、生じつつある変化の最初の徴は、ドイツ人のフランシスコ会士 C. ヒートリング⁽²⁵⁹⁾の著作に見出されるであろう。ヒートリングはベツレヘムの修道院長を務めていたが、オーストリアに戻って 1712 年に聖地に関する書物を出版した。この本には苦しみの道の小図面が含まれており、それには、H. サーストン- A. ブディノンが証明しているように、古い記述やスケッチとの相違が明らかに表面化している。H. サーストン- A. ブディノン⁽²⁶⁰⁾が校訂した 18 世紀前半に遡る著作群に照らせば、苦しみの道に沿った留の配列の決定は、当時はかなり混乱していたように思われる。著述家たちの間に留の記載の点でいわば完全な一致が存在していた先行の時代とは違って、この時代には完全に一致している著述家を二人と見出すのは不可能である。こうした全

体にわたる不一致の原因は、皆が皆好き勝手に、アドリヘムのシステムをエルサレムの地域的な諸伝承と合致させようとしているという事実にある。

修道士イエス・キリストのジョアンの著作⁽²⁶¹⁾には、H. サーストン- A. ブディノン⁽²⁶²⁾がそれを証明しているように、エルサレムの苦しみの道の留が最終的に正確な順序で示されているとともに、エルサレムのフランシスコ会士が 20 世紀初めに金曜日の午後毎に公式に行った十字架の道行きの信心業と同じ場所にそれらが位置付けられているのがわかる。

この短い理論書からは、今日実践されているような十字架の道行きの信心業が、信心の業や実践としてはエルサレム起源ではなく、十中八九ベルギー起源であり、また、その信心業が比較的遅い時代に西欧からエルサレムに齎されたということが明らかとなる。こうした結論を提出するとしても、我々は、フランシスコ会士、並びに信徒や巡礼者たちが、エルサレムにおいて 17、18 世紀に、また早くも 16 世紀の内に、救い主が十字架を負って辿った道を霊的にキリストに合一して従いながら、また、その苦しみに同情しながら、定められた数日の間歩いたということを否定するつもりはない。小さき兄弟会士アントニオ・デ・アラランダ⁽²⁶³⁾は、事実、1530 年には救い主に対する信心と畏敬とから、小さき兄弟会士がピラトの館からカルヴァリオまで道行きを行うのを習慣としていたと述べている。しかし、あいにく彼は、この道行きを行うに際してフランシスコ会士が従った流儀と方法については沈黙を守っている。また当時

は、この道は一般にカルヴァリオからピラトの館へと逆に辿られていたため、フランシスコ会士はおそらくこの慣例に従っていたと考えられる。1世紀後、小さき兄弟会士 B. スリウス⁽²⁶⁴⁾は、自身の修道会の修道士らが毎週金曜日に二人ずつ裸足で苦しみの道行きを行っていたと明言し、小さき兄弟会士ホアン・デ・カラオラ⁽²⁶⁵⁾も、1680年頃、フランシスコ会士が当時エルサレムで毎週金曜日に夕べの祈りを終えた後、夜間に十字架の道行きを行うのを常としていたと記している。救世主教会堂でのミサが終わると、フランシスコ修道会と同会修道院長はピラトの館へ向かい、そこで祈りを捧げていた。次いで彼らは、我らの主がそこで十字架を担っていた苦しみの道に沿って、主に同情しながら留を訪問していた。彼らは裁判所の門から出てカルヴァリオ山のぼり、聖墳墓においてその敬虔な道行きを終えていた。しかしこの場合にも、後者の十字架の道行きには細部が欠けている。とはいえ我々は、当時のエルサレムに実在した信心業から、留を訪問するに際して、フランシスコ会士が伝統的なシステムに従っていたことや、キリストが辿った苦しみの道とはまったく関係のない留、例えば悪しき金持ちの家やファリサイ人シモンの家なども訪問していたことを推測できる。さらに、17世紀末頃、彼らが裁判所の門から外へ出たというようなホアン・デ・カラオラが述べていることは認められない。なぜならば、既述のように、少なくとも17世紀初頭以来その門は塞がれていたからである。従って、フランシスコ会士がその頃十字架の道行きを行っていたことは認

めるにしても、エルサレムで当時流行していた諸信心業から、彼らが行っていた信心は現在の十字架の道行きの信心業とはまったく共通点がなかったか、あってもごく僅かであり、また西欧、とりわけベルギーで実践されていた上述の信心業とも共通点がなかったと結論される。こうして我々はやはり、今日我々が実践しているような十字架の道行きは、エルサレムではなく、西欧、とりわけベルギー起源であるという同じ結論に至る。

要するに、聖木曜日と聖金曜日の間の夜間にエルサレムにおいてフランシスコ会士や巡礼者たちが行っていた敬虔な信心業は、小さき兄弟会士 M. ビールが示唆していると思われる十字架の道行きの信心業とは決して比較できないものである⁽²⁶⁶⁾。聖地の管理者でスターニョの司教でもあった小さき兄弟会士ボニファチオ・ステファアーニが1552年頃に語っているところでは、夜のとぼりが降りる頃、修道士と民衆は最後の晩餐の食堂があったシオン山からヨシャファトの谷へと下り、キリストとともにオリヴ園に行って、そこで祈りを捧げてあらゆる種類の悔悛に専心していた⁽²⁶⁷⁾。そこから彼らは、キリストが牢屋に監禁され、一晩中眠らずに過ごしていた場所に向かっていた。夜が明ける頃には、彼らは列をなしてアンナの館やカイアファ、ピラトの館に赴き、最後に、キリストが十字架を負って辿っていた道を通り、その道のさまざまな留を訪れた後、聖墳墓記念聖堂に到着して、そこで磔刑や十字架上でのキリストの七つの言葉を黙想していた。また、その後は聖金曜日の聖務を行い、午後にはキリス

トの墓に赴いて埋葬を追悼していた。1483年にエルサレムに滞在した小さき兄弟会士パウル・ヴァルター・フォン・ギュグリゲン⁽²⁶⁸⁾の『聖地巡礼』(*Itinerarium in Terram Sanctum*)には、同じような説明が見られる。この敬虔な信心業は、実際、十字架の道行きとは少しも共通点がなく、木曜日から金曜日までの夜間と金曜日の午前中に、キリストがさまざまな場所で耐えた苦しみについての記念、回想として行われていた。この信心業は、従って、今日実践されている十字架の道行きの起源にはいかなる影響も及ぼしえなかったと言える。

こうしたすべての説明から導き出せるのは、ただ一つの事実だけが根本的かつ歴史的に立証されたものと言えるということ、すなわち今日実践されている十字架の道行きは、それ自体完全な信心業としては、エルサレムに実在している類似の信心業からは決して派生していないということである。というのも、我々は、エルサレムで流行した信心業が我々のものとは本質的に異なっていたことを立証したからである。十字架の道行きは、それに対して、霊的巡礼に関係する幾人かのフランドルの著述家（シント＝トレイデンの手稿本の不詳の著述家やベトレム、ヤン・パスカ、ピエール・ステルクス）が開始し、オランダ人アドリヘムが広めた一つの信心業の論理的で自然な帰結なのである。十字架の道行きは、次いで、かなり後年になって西欧からエルサレムに導入された。

（次号に続く）

〔凡 例〕（前号より一部削除して再録）

1. 人名やキリスト教の専門用語等の訳語や表記については、それらの多くを、新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典 総索引』研究社 2009 年に拠って統一した。
2. *と (N. d. T.): イタリア語訳者 P. ペッリツァーリが原註に付加した註
3. *と (M. P.): ミケーレ・ピッチリッロ神父の勧めにより、イタリア語訳者 P. ペッリツァーリが原註に付加した註
4. **と (N. d. S.): 邦訳者関根が原註に付加した註

〔註〕

(200) In *Ons Geestelijk Erf*, t. II, 1928, pp. 10-41.

(201) *Ibid.*, t. XII, 1938, pp. 322-324.

(201a) M. Meertens, *op. cit.*, t. II, pp. 104-108 を参照.

** フランス語の原文でもイタリア語訳でも「プランタン博物館」(*Musée Plantin, Museo Plantin*)とされているが、現在のプランタン＝モレトゥス博物館のことを指していると考えられる (N. d. S.)。

(202) G. Feugen, Nog eens: “Een merkwaardige nederlandsche kruiswagoefening uit de XVde eeuw”, in *Ons Geestelijk Erf*, t. XII, 1938, pp. 325-329 を参照。そこには序文と最初の三つの留、並びに最後の二つの留が示されている。

(203) *Een devote maniere om gheestelyck pelgrimagie te trehken tot den heylighen Lande, als te Jherusalem, Bethleem, ter Jordanen, met die rechte gheleghentheyte der heyligher Plaetsen, so bescheelijck beschreven, al oft mense voor ooghen sagh.* [霊的に聖地巡礼するための敬虔な方

法] P. カランティンがルーヴェンで 1563 年に刊行。同書については、その他、1630 年頃印刷された英語版の 3 冊の『霊的なエルサレム巡礼』(*The spiritual Pelgrimage of Hierusalem*) (K. A. Kneller, *op. cit.*, pp. 13-14 ; A. Janssen, *op. cit.*, p. 204 ; M. Meertens, *op. cit.*, t. II, pp. 97-98 ; H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, p. 108, n. 1) が知られる。

(204) *Op. cit.*, p. 127.

(205) K. A. Kneller, *op. cit.*, p. 162 を参照。

(206) Köln 1584.

(207) Köln 1590.

(208) K. A. Kneller, *op. cit.*, p. 163 を参照。

(209) *Jerusalem sicut ... cit.*, p. 124, n. 118; *Theatrum ... cit.*, p. 164, n. 118 を参照。

(210) *Theatrum Terrae Sanctae*, p. 180, n. 255 を参照。

(211) *Ibid.*, p. 175, n. 239 を参照。

(212) *Op. cit.*, pp. 128-129 を参照。

(213) *Theatrum ... cit.*, p. 164, n. 118 を参照。

(214) *Ibid.*, p. 172, n. 207.

(215) In *Arch. Franc. Hist.*, t. II, 1909, p. 339.

* 聖墳墓の鍵は今日に至るまで回教徒の管理者の手中にあることを明確にしておく必要がある。夜間は、入場料を払ったら内側を閉めさせて大聖堂内でゆっくりするのが普通であった。扉の開閉は今日でもきわめて厳格な規則下にあり、修道士に従っていない (M. P.)。

(216) Éd D. Hassler, 3 voll., Stuttgart, 1843-1849.

(217) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, pp. 48-59 を参照。

(218) 例えば、*Peregrinationes totius Terrae Sanctae, quae a modernis peregrinis visitantur*, Venezia 1480 (ページは打たれていない)；

1596 年にエルサレムに滞在したユトレヒトの Jan Van Kootwyck (Cotovicus) の *Itinerarium hierosolymitanum et syriacum*, Antwerpen 1619, p. 157 sqq.; 1599年に旅行した Aquilante Rocchetta (R. Röhricht, *op. cit.*, pp. 220-222 を参照) の *Peregrinatione di Terra Santa*, Palermo, 1630, pp. 131-148 などを参照すること。

* 「裁判所の門」については、著者の記述は曖昧である。この「門」は全くの作り話であり、おそらく存在したことはない。従って、けっして「破壊された部分」や「閉鎖された部分」に当たっているわけではない。この名称は現在第 7 留が記念されている 2 本の円柱 (今日は 1 本のみ) に与えられていた。この円柱の近くで、おそらく当初は中世的な呼称をもっていた決して無名ではない建物のひじょうにゆったりとした入口の敷居が見出された。E. Alliata - P. Kaswalder, “La Settima Stazione della Via Crucis e le mura di Gerusalemme”, in *Liber Annus*, 45, 1995, pp. 217-246 ; tavv. 1-4 を参照 (M. P.)。

(219) *Op. cit.*, pp. 354-364.

(220) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, p. 71、並びに *The Itineraries of William Wey ... to Jerusalem an. D. 1458 and 1462*, London 1857 を参照。

(221) *Del viaggio in Terra Santa*, Firenze 1822. 十字架の道行きについての記述は pp. 28-38 に見出される。

(222) R. Röhricht, *op. cit.*, p. 108 を参照。

(223) *Reyssbuch des heyligen Landes*, Frankfurt 1584, p. 134.

(224) R. Röhricht, *op. cit.*, p. 212 を参照。

(225) *Anversa* 1608. 十字架の道行きに関する記述は pp. 109-119 に見出される。

(226) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, pp. 64-65
を参照。

(227) *Ibid.*, pp. 68-70.

(228) *Loc. cit.*

(229) *Loc. cit.*

(230) *Op. cit.*, p. 28.

(231) *Op. cit.*, p. 136.

* 情報は修正されている。というのも、そのデータは 1639 年（著者は 1880-81 年の増刷を引用）のアントウェルペンでの彼の最大の著作の出版に関係しているからである。フランチェスコ・クァレスミオ神父は 1616 年に聖地に達し、そこに 13 年留まった。彼は再び聖地に戻り、1634 年まで 9 年かけて自身の著作の最終編集を行った。Fr. Francisci Quaresmii OFM, *Elucidatio Terrae Sanctae*, Brani scelti e tradotti da Sabino De Sandoli, Jerusalem, 1989 を参照 (M. P.)。

(232) *Historica, theologica et moralis Terrae Sanctae elucidatio*, Venezia 1880-1882² を参照。

(233) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, p. 155 を参照。

(234) *Le pieux pèlerin, ou voyage de Jérusalem*, Bruxelles 1666 を参照。

(235) *Ibid.*, p. 187.

(236) *Op. cit.*, p. 83, n. 1, e p. 186.

* 理解不能な文章。フランス語の原文ではおそらく一部が省略されていると思われる。

「…聖墳墓の中庭には」の後に、おそらく「…もはや出発の場所は存在しない」といったような文章があったに違いない (N. d. T.)。

(237) *Op. cit.*, p. 78.

(238) *Op. cit.*, pp. 136-137.

(239) *Op. cit.*, pp. 139-182.

(240) *Den godtvrughtighen pelgrim*, t. II, Gand 1789, pp. 150-173 を参照。

(241) A. Janssen, *art. cit.*, pp. 208-209; K. A. Kneller, *op. cit.*, 129-132; H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, pp. 192-195.

(242) *Op. cit.*, p. 137.

(243) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, p. 75 を参照。

(244) R. Röhricht, *op. cit.*, p. 181 を参照。

(245) *Verdadera informacion de la Tierra Sancta*, Alcalá 1563, pp. 75-80 を参照。

(246) *Op. cit.*, pp. 109-119.

(247) *Op. cit.*, p. 76.

(248) *Op. cit.*, p. 137.

(249) *Bijdragen tot de Geschiedenis van het bisdom Haarlem*, t. XI, 1884, p. 85 以降で公にされている。

(250) *Jerosolymitana peregrinatio*, Antwerpen 1614, p. 79.

(251) H. Thurston - A. Boudinhon, *op. cit.*, pp. 187-188 を参照。

(252) *Bouquet sacré ou voyage de la Terre Sainte*, Rouen, s.d., pp. 144-156.

(253) *Neue Jerosolymitanische Pilger-Fahrt*, Würzburg 1664, pp. 67-73 ss.

(254) *Op. cit.*, pp. 149-187.

(255) *Trattato delle piante e immagini di sacri edifizii di Terra Sancta*, Firenze 1620 を参照。

* フランス語の原文は、この点に「既掲の」を付加している。しかし、この人物は後にも先にも挙げられていない (N. d. T.)。

(256) *El devoto peregrino y viage de Tierra Santa*, Madrid 1656.

(257) *Cronica de la provincia de Siria y Tierra Santa de Jerusalem*, Madrid 1684.

- (258) *Op. cit.*, pp. 189-190.
- (259) *Peregrinus affectuose per Terram Sanctam et Jerusalem conductus*, Gratz 1713 を参照。
- (260) *Op. cit.*, pp. 191-192.
- (261) *Viage de hum peregrino a Jerusalem*, Lisboa 1818 を参照。
- (262) *Op. cit.*, pp. 192-196 を参照。
- (263) *Op. cit.*, p. 80.
- (264) *Le pieux pèlerin*, Bruxelles 1666, p. 449.
- (265) *Op. cit.*, p. 598.
- (266) “De historia 《Viae Crucis》”, in *Arch. Franc. Hist.*, t. I, 1908, p. 57.
- (267) *Liber de perenni cultu Terrae Sanctae*, Venezia, 1573, pp. 35-39.
- (268) H. Sollweck 刊行、Tübingen 1892, pp. 139-142.